



平成 30年 11月 19日
国立大学法人 弘前大学

報道関係各位

りんご園で繁殖するフクロウが、害獣ハタネズミの個体数を抑制していることが科学的に検証されました。

【本件のポイント】

- ・弘前大学農学生命科学研究科の東信行教授と岩手大学大学院 連合農学研究科のムラノ千恵 博士学生らの研究グループは、農業者団体下湯口ふくろうの会と協働し、りんご園に巣箱を設置してフクロウの繁殖を誘致している。
- ・フクロウが営巣したりんご園で、害獣であるハタネズミの生息密度を計測した結果、フクロウの営巣が周辺のネズミ密度を有意に減少させていることが検証された。
- ・本研究の成果が、2018年11月13日(英国日時)に、British Ecological Society 発行の Journal of Applied Ecology に掲載された。

<https://besjournals.onlinelibrary.wiley.com/doi/full/10.1111/1365-2664.13295>

【本件の概要】

近年ハタネズミによるりんご樹の食害が深刻化し、対策が求められている。本研究で着目したフクロウは、以前はりんご樹の樹洞を利用して農地で営巣する農家には馴染み深い鳥であった。研究グループは、近年のハタネズミ被害の深刻化の一因が、捕食者であるフクロウの営巣場所が農地から失われたことにあるのではないかと考え、2014年よりフクロウの繁殖支援を開始した。2016年からはフクロウが繁殖した園地でハタネズミの個体数の変化を測定し、フクロウによるハタネズミ個体数の抑制効果の科学的検証を行ってきた。

その結果、繁殖期のフクロウは雛を育てる1ヶ月に最大300匹の餌生物を捕獲すること(うち8~9割がハタネズミ)、さらにフクロウはハタネズミ密度の多い園地を選択的に営巣に利用し、巣周辺ではハタネズミの個体数が平均63%減少することが明らかになった。

本研究の結果、農地におけるフクロウの繁殖支援が獣害管理に有効であることが示された。研究グループでは引き続き獣害管理の手法に関する研究を進める予定である。

【取材に関するお問い合わせ先】

(所属)	弘前大学農学生命科学部
(役職・氏名)	教授・東信行
(電話・FAX)	0172-39-3824
(E-mail)	azuma@hirosaki-u.ac.jp